五十而知天命

谷口あさこ

今年、五十歳になった。

五十といえば皆さんは何を思うだろうか。

私の中でまず思い浮かんだのは織田信長だ。

人間五十年　下天のうちをくらぶれば　夢幻の如くなり　一度生を得て　滅せぬものの
あるべきか

織田信長が炎の中で死ぬ前に謡ったと言われている辞世の句。この句をきちんと読んだことがなかったので、改めてネットで調べてみた。

人の一生五十年　天の下に広がる世界の中で比べてみれば　夢まぼろしのように儚いものである　この世に一度生を受けて　死なぬものが　あるだろうか

幸若舞「敦盛」の一部分。諸行無常みたいなことだろうか。案外普通のことを言っている。私は信長のことだからもっと烈火のごとく激しい憤りか、人生派手に楽しかった的なことを謡っているのかと思っていた。勝手な信長像を築いてしまって申し訳ないと謝っておこう。

ネット画面をスクロールしていくと、ふと指が止まる。「数え四十九歳(満年齢四十七歳)」で亡くなったと書いてある。そうか、私より若くして死んじゃったのね。この時代、平均寿命が今よりも低かったであろうが、本能寺の変がなければもうちょっと長生きできたであろう。再び信長に手を合わせ首(こうべ)を垂れる。

他にも五十歳でなくなった有名人がいるのだろうか。私は続けてネット情報を探る。

国内、海外を問わずたくさんの人名があがっているが、私の知識が浅いばかりに知らない人が多すぎる。西郷隆盛、五代友厚、伊藤佐千夫、夏目漱石と知っている人の名をピックアップしていく。横光利一、堀辰雄、坂口安吾……やはり、作家の名前には反応してしまう。

伊藤佐千夫『野菊の墓』中学生の時に読んで主人公と民さんの素朴なやり取りと引き裂かれる恋に対して素直に感じ入っていたものの、私としては、主人公と隣家のお嫁さんとの間に悪い噂が立ち、その顛末を描く『隣の嫁』『春の潮』の方が好みだった。しかし、今この文章を書きながら『春の潮』の結末がどうだったのかまったく覚えていないことに気がついた。四十年近い時間の流れは恐ろしい。面白いと思ったお話も忘れてしまうのだ。たぶん、バッドエンドではなかったと思う。当時の本はもう所有していないが、今は「青空文庫」という気軽で手軽な電子図書館もあるので、読み返してみよう。

夏目漱石『吾輩は猫である』高校の教科書に載っていた抜粋部分（屋根瓦の上で目玉焼きを作ろうとしていた場面）が気になって、文庫本を買って読んでみたらハマった。登場人物たちの真面目なのか冗談なのか分からない会話や行動、猫の冷めた語りが単純に面白かった。明治に書かれた小説が昭和六十年代に読んでも噴き出して笑えるという事実にすごいと当時感心した。『坊っちゃん』『三四郎』『こころ』どれも興味深く素晴らしいが、数ある漱石作品の中で『吾輩は猫である』が一等好きだ。

横光利一『旅愁』いつか読もうと三十年近く積読している。長編すぎて手をつける気力が出ないし、ページを開いたところで活字の小ささに辟易する。この作品に限らず昔の文庫本の文字は小さくて老眼の進んだ今の私には読むのが困難だ。やはり、これから読むのだったら文字の大きさが変えられる電子書籍がいいのだろう。未読の作品はさておいて、私の気に入りの作品は短編の『蠅』だ。ラストの衝撃は私をやるせない気持ちにさせた。不条理。虚無感。現実の出来事で感じる感情よりももっとずっとむき出しで研ぎ澄まされ

た唯一の感覚。それは読書でしか感じられないのかもしれない。本から与えられる純粋な感覚に十代の私は喜びを見出していた。

堀辰雄『風立ちぬ』二十歳前後に読んで、当時一番美しい小説だと思っていた。恥ずかしげもなく就職活動時の履歴書にもそう書いた。しかし、今考えると何が美しかったのかよく覚えていない。恋人の死にゆく姿にひたすらに向き合う主人公に感銘を受けたのだろうか。五十歳になった今また読み返してみたら、また違った思いを抱くのだろう。肺結核で隔離された施設で死にゆくヒロインの姿は、新型コロナウイルスに侵され逼迫した現在の世界において新たな意味を持つのかもしれない。

坂口安吾『堕落論』でも『白痴』でもなく、私の一押しは『青鬼の褌を洗う女』オメカケのサチ子とそれを囲う男の話。サチ子は男の間をフラフラしているが、受け入れるその懐はとても深い。男はその深さにハマり抜け出すことができない。サチ子の楽天的で優柔で多情で母性のような懐の深さが二十前後の私にはとても魅力的であった。憧れだった。女性からは特に同意を得られないであろう私のこの思いはどこから来るのだろう。そして、この作品を再読して今の私も同じように思うのだろうか。確認してみるのも面白そうだ。

筆が進むうちに、五十歳話から若い頃に読んだ読書感想になってしまった。とにかく、この作家たちは皆五十歳で亡くなっている。しかし、彼らが生んだ作品はその姿を変えることなく未来の人間に何かを与えていく。それは作家冥利に尽きることだろう。

彼らは亡くなる時、自らが成すべきことを果たしたと思っただろうか。それとも、道半ばで倒れたと思ったのだろうか。

五十にして天命を知る

孔子の論語にある有名な言葉。五十歳で天から与えられた天命を知る。ウィキペディアによると天命とは、天から人間に与えられた、一生かけてやり遂げなければならない命令のことだそうだ。

そうすると、先述の作家たちは五十歳になる前にして天命を知り、やり遂げてしまったのだろうか。

そして、私にも一生かけてやり遂げなければならない天命があるのだろうか。すでに与えられているそれにこれから気づくのか、それとも、これから与えられるのか。

ウィキペディアを読み進めるとこう書いてある。

天命は使命と運命の両方の意味で用いられているので、論語のこの表現を巡って、《運命》や《宿命》（自分にはこれだけしかできない）ということを意味しているのか、それとも《使命》（自分は人生でこれだけはしなければならない）を意味しているのかで解釈が分かれている

自分にはこれだけしかできない、という言い回しがなんか悲しい。五十歳になってもまだまだ可能性がある、新しい道がいくらでも拓けると信じたい。

今の世の中、人生百年。五十歳なんて折り返し地点、まだ道半ばだ。せるの合評に参加するようになって早や二十年強。自分のしたことが天命になるように努力していきたい。